
月の涙

五条アリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の涙

【Nコード】

N2452F

【作者名】

五条アリカ

【あらすじ】

夜の川原に二人。何を感じ、何を思うのか。月は語らず、二人を見つめていた。そんな話。

「あの月は泣いているのかな」

そんな、問いとも独語ともとれる言葉が、私の耳朵を揺らした。見上げた先には満月が、光のない空に独り浮かんでいた。人気のない河原に二人、草の上に腰を下ろし、空の鏡を静かに見上げる。

月を遮る雲はない。しかし、暗い夜空には星もなかった。透き通る闇の中で、月だけがぼんやりと空に佇んでいる。星の儂い光は月光に塗り潰されて、一つ残らずなりをひそめているのだろう。

「……わからない。でも、独りで輝く月を見てると」

——涙が出そうになる。

その言葉が私の口から零れることはなく、代わりに真白な息だけが漏れた。冬の澄んだ空気を、暖かい吐息がぐぐり抜ける。白く濁ったそれは、冷気に滲んで、間もなくとけた。

ふと、思う。

月は太陽の光を受けて、切れるような、冷たい銀光を放っている。月は太陽の光を反射して輝くが、太陽が月の光に気づくことはない。その様は、永劫届くことのない太陽に向かって、届かないとわかっていても必死になって手を伸ばしているようで、

「あの月は……可哀想だ」

知らず、私はそんな言葉を口走っていた。

——あなたも、この空の繋がるどこかで、この月を見上げているのですか？　そこでは、優しい涙を流せていたらいいのだけれど。

思いをはせるは遠い過去、もう二度と届かないと知っている夢のような黄金の日々。どうして、悲しい過去を振り返るときは、楽しかった思い出ばかりが浮かんでくるのか。

月がその問いに答えるはずもなく、ただその銀色の瞳で、変わらぬ光を地上に零す。

私の隣で月を見上げる横顔が、ゆっくりとこちらに向けられた。

「そうだね、そうかも知れない。でも……今日は、いい月夜だと思わない？」

そう言って私を見つめるその顔には、優しげな笑みが浮かんでいる。

「ああ、それは間違いないね」

だから、私も笑って月を見上げた。月を遮る雲はなく、空を彩る星もなかった。

ただ空に輝く満月に、心奪われていた冬の夜。

またひとすじ、銀の雫が零れて落ちた。

(後書き)

結構前に書いたSSです。
感覚だけでも伝わったら、嬉しいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2452f/>

月の涙

2010年12月10日22時39分発行